



9  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1  
0

9  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1  
0

9  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1  
0

9  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1  
0

9  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1  
0

尾斐通家邑五之下

新古今集

雜歌下

十五首番歌合

悵政

船の波の下ねのくちをまの下老およき海うみ人のよいゑの世

いとすくつゆあさの長くまこと。

寂鷹天院障よし人定じんじやうさなむ

定家耕白

大波の浦おほなみより下くだともよめなよあひ下くだてゆる广金  
上元ハ序じ�のゆくもすかと化大院だいいんの浦うみのゆくもすかと

小人よまき六便りへとまくわなうわむトモ。せめど、  
以が成るもととんおんじんとれいよ。そしやま  
えさんねをえ。ほよ。体観の度、本流の漁よがふ  
まくよもとをなまき。袖あて巻のわやすとひあ  
をと達とやすとよもと。ばかうす。院の浦の浪路。霞路  
をと達とやすとよもと。とあるとき。今もゆとり。

辛首歌をり時 慈因大僧正

世の半れもり室ふさわのうきははうそ。ねふな  
一二タ。ましも世のやほりも世よ入を事とき。つづけの改  
つ。半は黒明時から。首のき。うる明時。あらしと世の  
罪もがとき愚不肖たる者ばかり。うらうらと。世の  
をと達とやうと。うきと。乱る。よしと。まきと。  
まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。

べきせのうきと。まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。  
まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。  
まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。  
まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。  
まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。まきと。

の縁とまきと。

例へぬ事はなし。かの事はなし。侍ふ

例へぬ事はなし。

だの事。がの事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。  
だの事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。  
だの事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。  
だの事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。  
だの事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。  
だの事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。の事。

題へらば

思ふ世とのれし人の事教や我等も見え  
せどもよき事もあらずとおもふ。言ふのはほの  
まを。我の事もあらずとおもふ。そぞ  
くともかの半をばのせよしりえといふ人も。我等と  
おもゆる事す。何とつては。世をよむ。けむ。行ふ  
うらん。諸形の世捨人。是も佛事。全も  
うらん。毎を捨てて心をの母。あ形の母を  
すて。けり。よすて。言ふのいふと。たゞ  
おれも。以上よし。

## 西行

教不ぬ事よろめあひをよしとす。斯なり

うれて。いふ事。何うて。うる難。

下の事。アノ人きのわく。ひよる。空そへ  
ク。教不ぬ。才德智徳も。も。のう。わく。才智も。才  
も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
何そ才徳て。も。も。も。と。も。も。も。も。も。も。も。

うる人のひよる。も。ひよる。もの。ひよる。ひよ  
結ゆゆひ。俗事。料簡。と。あき。む。ま。の。想  
常不佛の道。よ。ま。の。料。考。う。本。の。也。ト。さ。も。そ  
れ。命終の時。隕。と。の。料。考。ハ。い。と。と。自。年。考  
ハ。上。頑。の。お。も。よ。せ。て。と。は。う。と。さ。う。と。ま。ま。  
が。づ。い。の。せ。い。を。よ。ち。う。づ。い。の。せ。い。と。死。は。の。要。考。ハ。い。ず。  
一。首。の。き。ハ。お。う。き。を。よ。ま。せ。て。惡。業。煩。惱。と。う。す。か。う。う。う。  
う。れ。う。は。そ。の。要。考。ハ。行。と。せ。う。と。あ。ふ。と。と。

、末月を以て身を退りん當の如きふる世  
きのふありし所が世の中よりとあはれうして身  
力を尽す事すやうとせ中の多くある。其のをひどく。  
、うけときた人の姿よりもとぞや非又後じへき  
十善戒とばらうる所とて惡過よはる者とへうよめらね  
か。うけときた人のゆとりはようけときた所よ偶うかたるものだ  
よあ葉をうて御くらうと又多めよはじきう。おまけうさぎ  
と姿とふりがうすれと人方の心をもて、うちもとあくき。

守たば親王が辛夷と寂蓮

そしきてもねづきわき世をりうがとほれむふすね  
世をりとみてそしきては無ふやうがと缺く本わざ守も  
身バカの因縁あれとしきてはうき事の縫合せと  
缺く本わざと。そのとが缺くとく世ノきぬぞア。がく世と  
缺く本わざとをれわざとすよとりうめとあきなき世。

述懐

身の出をせず一矢へてせんじゆくとすがれすなれ  
身のうきやみを告じて早く身をよし詮き事する情  
もえせとてるまくあいとせんじゆくと身をうしむる  
すと末月を遇す。よのちうつと。二方と俗よきうつ  
ふせんの義とあす俗と何とまるかととふる身をあらきをきむ  
身のうきよと。そのうきのうきづづぬを下すとるゆをせ  
れとくまきよとまきうつてせきいとひをうと。既に  
とくとくあひとと既よいひ捨てばくわす。上  
身出でる。とくまく俗より松の舟を。

急用大便

何事をせむかとへまくとねほきふ袖をめぐる  
ゆめいのさうとせあむくとく。うでひはるふ。今何  
よそははらややうるを。うれはうすで度もそめく。  
ソラの逃げゆよもれん。ソロとくき身はたれの室  
ソロとくきの身をもね。一見とぞつよるを。公  
くの財ひうりて後悔。てすく。ソロのうきる  
だの身のうれいへうき。ソロ。大食む時の身を。父  
お父とく事俄そく。院年書年をふみ。あれ。年書は  
サなへせよ。おもわぬ。やね。やね。さくし形をうき  
上向。我。家。やれ。か。や。世。あ。俗。人。あ。ね。

とふとほとせまなれ。とくとくとくとく。なでせま  
とほとす。今まのけとせま。は世の急越。もせじく。きす。す。何と。や。も。ね  
す。く。も。ち。た。あ。う。ち。ハ。聲。西。の。聲。度。も。あ。い。く。し。も。と。あ。ぬ。き。び。さ  
と。せ。た。る。が。り。き。と。ぎ。と。と。ハ。あ。す。の。再。よ。く。う。の。も。の。じ。あ。る。が。う。く。う。き。  
ほ。て。上。タ。の。意。六。乘。行。法。度。下。行。度。是。を。も。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
お。あ。す。お。家。一。て。ほ。り。  
ま。う。お。す。と。  
犯。が。持。す。の。も。と。此。ミ。な。き。と。き。こ。ゆ。れ。も。下。タ。ハ  
の。犯。被。と。や。え。全。危。く。あ。ね。と。ひ。と。い。事。や。わ。く。次。不。お。急  
く。そ。く。わ。く。と。く。と。く。ア。ネ。と。ひ。と。い。事。や。わ。く。次。不。お。急  
く。お。急。報。と。く。お。家。一。て。ほ。り。ま。が。を。は。生。佛。身。を。う。べ。て。の。ま  
と。お。う。つ。お。わ。よ。お。れ。て。ま。う。も。あ。ぬ。地。獄。界。の。犯。被。と  
や。え。し。と。す。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。  
そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。  
そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。  
そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。そ。と。

アラミ。上人の歌は世よりして流麗なり。一曲と爲事より可なる  
下。かのうの高車をとつての姿を。上下より縦横あり。あまうらう  
アラミ。もじりて定家と庵の英雄の如きの世人を奇とす。  
アラミ。れりをもす。てりをもす。てりをもす。てりをもす。

アラミ。セノ(き)。歴史傳承の比擬の英雄の歌也。下。  
アラミ。セノ(き)。歴史傳承の比擬の英雄の歌也。中。

アラミ。セノ(き)。歌なり。おはなれ。中。  
アラミ。セノ(き)。歌なり。おはなれ。中。

和歌にて遠懐の、こうを

山はるや庵やあれど何れかすかひゆ

ひや遁世をやひばして山里の庵より人をぞひて。  
火五引ひ。火はえ本をすとすて。事をめわす。  
庵はうきや。やくにまうきよ。やくとけ。  
アヤミ。うかんとむ。うかんとむ。うかんとむ。  
火五引ひ。火はえ本をすとすて。事をめわす。  
まもと。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。  
アヤミ。うかんとむ。うかんとむ。うかんとむ。  
火五引ひ。火はえ本をすとすて。事をめわす。  
アヤミ。うかんとむ。うかんとむ。うかんとむ。

通典辨

神主也あそばせむすても別り日やまを定  
うち神の國をあそびておひなとるを慶  
ときもあ。酒を青の結局、例の國のおまかせ。今  
後後をうどあいひをせしげめうちやうすれ  
きつ月をきのくらむと慶とすりとて書かれ  
るをとてわざとまく。今わねをうらとてき。秋葉  
あそばせゆとまく。今わねをうらとてき。秋葉

定家注

天代あるは何を玉の井のすくまとひき物を

あすさ何を玉の井せんかとあるがすくまとひき物  
としう哥とどりて天代はあるは何を玉の井を尋。  
かうじしお井とほりて天代あるは何を玉  
の井の長くすくまとひき物と何をと  
へふととれ結したる。され本歌の詞  
をどうしてはすくまとひき物。本歌の詞をと  
ひき物の長いのがり。このう。あすは何をとひき物とる。ま  
りふとをせすすまやからう。いいうたのじのれとあうのかり  
同くて古事記うたう。一首の三ハ。すよきてきはくわいれ  
そそ長そくやまく。そのがすあす。今長そくもと勝まさ。  
かくはましゆそは集の比のすくまとひき物と  
もうかのとがちゆでのと。ト白單下のうえ

述懐のきあつて。六代あいだれを命とぞ  
とぞ。万るれどふとよひづる。わがの空せよりきて。父  
うじゆきはふなる。やまとがきよまよそ。  
沈淪のいまとむれがれ。行述懐のまこと。

家隆朝に

たゞ秋のねえの水きあらむといのふ。おとせ  
アヒトかしよきてくも。年代神をもすん。お天の  
ため。ニシタ今歌の物二句を。けくらうくうぐ  
たす。夢きぬゆのゆす。つばきもわすれしと。見  
ゆ。おもてのうなづく。おもてのうなづく。本引を。いはらの料  
こさ。されどさよをす。すととす。おもよへ。おもよへ。  
竹やくわきとくわくとく。モードモードを。のちへきなわ

まもあづかる。何とすき。森とよまととりあずへ。  
夫をいめえきね。た。何とすき。わはりて。別なあづま  
わす。物をくわえ。われ。われ。われ。物を。林の水きあらむ  
おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。  
おとせ。五代かね。まほ代の長。うれ。うれ。うれ  
もやく。ほめう。ほめう。もやく。もやく。もやく。もやく。  
てげほれ。このつづり。わく。わく。わく。わく。  
おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。  
おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。  
おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。  
おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。

の唐や日本川、もひもひもひもひもひの邊  
本教。多角の様に、あうじうはほのま  
をめわしよるすは。じうじきはとしりけふ。  
うそじうひれ。けふのとくはづねす。キ・外音・ハ  
あ・本教のトサの主とすらて、本教とまろよど  
全とよとよとまとまきなみ本・あさ・すトミの校と.  
かねがのつゝーうきこりうかり。リ・教とまろよど  
物々とまうの、うやくわは年とてすく分かう。ちと  
むりてうきこりうかり。年とてすく分かう。ちと  
ととしまくすとほ・ばとよとすせとととと。  
おの本うじととととととととととととととと  
せふ・おとととととととととととととととと  
ちうだいめおとととととととととととととと

まの山からまくす月・れ風すとし神よあざれつ  
まやとめやとめやとめやとめやとめやとめやと  
めやとめやとめやとめやとめやとめやとめやと  
神よ神よ神よ神よ神よ神よ神よ神よ神よ  
とめやとめやとめやとめやとめやとめやとめやと  
とめやとめやとめやとめやとめやとめやとめやと  
とめやとめやとめやとめやとめやとめやとめやと  
月・れ風すとし神よあざれつとととととととと

## 雅經

古代よりくわものひめの守り木の空  
石もあり。寺ときたあれ。まことひづかのあいす  
道もあれ。四句とあるむち。まきのひまとせ  
ともあり。四句とあるむち。まきのひまとせ  
ト。寺とくわの角はよし者。寧まくは隣をなほ。  
ト。寺とくわの角はよし者。寧まくは隣をなほ。  
一首のこめてなまえうわ。まことひづか。まきのひまとせ  
かれ。寺の背をもあざまつて。二行ばかり  
も。寺のねうらむをかず。寺とくわの角はよし者。  
とあらき。古代よりくわの木。まことひづか。  
間をとゆ平トル。もとよりけづり。ほづく保  
けづく。

## 後咸安

寺とくわの角はよし者。寧まくは隣をなほ。

月のさやさとじと。あ心の海よ。やまと。月  
と。御めの神をふれと。と。御のやまを。林のやま  
と。月ふと。と。あるたと。一。はなと。ハ奇のと。奇のと  
くのと。を。うしあわす。林のと。のと。うめか。かく。かく。かく。かく。  
はなと。はなと。のと。のと。うめか。かく。かく。かく。かく。  
はなと。はなと。のと。のと。うめか。かく。かく。かく。かく。  
女と。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
後のつる。と。迷懐の。と。心の。歌と。かく。けりと。と。おと。おと。  
柳と。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
柳と。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
柳と。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
柳と。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
柳と。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
柳と。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。

は物語らずしてとくも述懐の方も多うて。  
又詮なき難よきむらへきうばの如づれば初のとを多  
くの本よとも書はてがんと難し。とある本中、  
せても本のときてはじめて、とくも書はてがんと  
なると、然へるを、書われをせよと、し乍らいふ  
もとと戰はざるをとくも書はてがんとや。三の  
匂のとへ上より一と様しとすとふまことつて  
きを、とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
つて、とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書

と情すらぶ歌人の情とぞ莫次。一首のとわねひとて  
則て、とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
の本よとも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
つて、とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
はてがんとや。秋と春ととくも書  
はてがんとや。秋と春ととくも書

二句とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書

### 千首番歌令、 摂政

湯の、とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
の本よとも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
つて、とくも書はてがんとや。秋と春ととくも書  
はてがんとや。秋と春ととくも書

### 題一

もあらひあはしてと事の本ほんとむれ世のふるひ  
うふらうしておしまへり事あしめいね  
あらせよとくま物のこゝにまつもすむと嘆がれ  
をまよふえ捨てせばわきだるふくせたどく  
一方無く水の流れの川はやかまく  
そがくまほとくまくまくわくまく  
はくと流てはくとくまの風ふう例え一とく  
の事のほんとく

やくへやをやすかと高さがすとせや過ほ

紫雲の舟ふくらみやかな國くにむかひたま  
りくふくらむ物あらゆきのとく止ふ用ひだとけのとく  
えき。きて各所の、うとくとくとくとくとく  
はくすくはくすくはくすくはくすくはくすく  
きふくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

平首船のゆよ達懐中たまはる

おとてせまくいとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

准助と志宗

せきゆうじゆじゆくわざわざりておもひしむ  
世の中のうらやまやうめにあればおれはお世主家  
おとねばんがんりすとくのとくあわざれどおひよ  
あります。

述情 仁木源公衡

捨やぬあ事そつまひりそむらふる下をゆきそ  
三口そく今もへんごとくうひにこちやうそく  
五口そくおのり本とくまなまくひをそくとくまそく  
きゆやうえ捨てて  
ある我身のうきよせ

医師丸

うきよせをすうく令我なせよしむのうきよせ

よくきみ入らるる奇くいと奇はきうんすくじめゆああとせ  
精選をもようよもあら上吉に傳ひの奇。やまとではよさうそくを  
わらわぬかわらふれりうそきをあるば傳ふハ外うちもと。上吉を  
のりアヒニ盛のんとれをそなへひのひのひのひのれあり  
きしるくもとは重複多めのうき一つもと甚はるくもと  
ととよしもとあるとあると一个師範し。嘸ふ我刑を爲すれ  
ある前あつてはせをれをうりとねかすとす。而確そがりとすや。その  
ひすとせぐとくわく門のくわくせそとくわくとくわく  
そりとくとくわくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
実情をりして并の不當とするあり。但うれりて。く人のほしよされ  
といひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
ひだらかのことを辭すと。奇と人の性はくとくまむとんや高手す。必用儀をも  
まむとぞりしげに間ある令我をと。是れうち大なる惑なるよ。鹽野  
平とすとすとくわくをれ。いとくわくとくわくとくわくとく

入道戒并白毫百字并

刑部頼輔

阿那モタツボニ制義既るこの世を

のりうぢにいふとへた後の身ひとさうす。つまを鹿ぐらひる。とる。

清てはるす草を寄る深家安。すこしとてはる  
タリ。むすけの行ゆる後原行能

うきなすきの城をばす。しよよみをくすし山河の水  
家ちくに寺内の園籬をくわえ。院すはうせとすつま。三万  
き。春覧はいれども。二か。なく。おは沈淪して。ば。御事とたまえ  
あきだと。下々がくとも。すま。おは。御事のや。沈淪を  
ちやく。世の愁を。おちく。沈めす。じき。あきだと。すま。すま。

ガのやくすひてはまくらひせんきわ

てほたる葉とて 鴨長明

まかみいは風そむかひよ。そむけはれん  
かみかみかみと。わたり。わたり。まき。園籬と。と。お。う  
はうけの。一のき。あひと。まき。まき。まき。まき。まき。まき。

因縁を。氏人のまき。あひと。まき。まき。まき。まき。まき。  
カのまき。ハ。い。まき。まき。まき。まき。まき。まき。まき。  
ケ。ア。蘇ある。あ。を。蘇。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。  
ス。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。

題一 異

西行

うすすみ。はだす。あわく。紫の庵の。うすすみ。  
紫の庵の。うすすみ。あわく。紫の庵の。うすすみ。  
うすすみ。紫の庵を。あひす。同。意。あひす。うすすみ。  
うすすみ。紫の庵を。あひす。同。意。あひす。うすすみ。  
うすすみ。紫の庵を。あひす。同。意。あひす。うすすみ。

住まよ頬着。と。あ。

月の行山を。たう。と。時。す。の。月。い。と。在

月の行山を。西。上。と。西方。旅院。身。と。念。船。命。た。と。

下。と。下。と。行。は。卷。界。と。残。身。を。い。と。と。と。と。

五十首歌中。 無事。と。傳。と。

ト鬼の流あれし歌めのまことに。まきひは  
もわしくはよふ一章もせんじゆうきより。まくは  
まくと何とをすかして。まくのまく。人あらやも  
ちよ月をかうして。まくのまく。まくのまく。まくのまく。  
まくのまく。まくのまく。まくのまく。まくのまく。まくのまく。

（略）

もさのまく

せうもちのまくつき。おほつつきをねつとき。だらのまく。そも月はまく  
あつとす。まくせんじゆうきより。まくはまく。まくはまく。まくはまく。まくはまく。

まくのまく。まくのまく。まくのまく。まくのまく。まくのまく。まくのまく。

西行は師出まつりまつあて。首の家。竹。首  
日。あかうて。けふと。や。だり。む。こ。と。

## 八條院高倉

豪華。内田の殿のやうも。うね道を入壁。床

（ちくが家）内田のやうも。下。太。佛。人  
と。隣り。す。徳。輝。と。ま。す。と。あ。ん。と。ま。す。

太神言歌今。大。上。天。宣。御。製

大室。じきよかと。よす。内田。じ。よ。の。よ。と  
物。二。と。結。今。と。わ。と。勢。と。行。ま。の。事。と。あ。と。く  
有。下。と。が。わ。と。無。と。あ。と。事。と。の。玉。と。り。本。の。事。と。よ  
あ。と。り。手。と。下。と。よ。と。う。れ。ね。事。と。る。が。尔。大。也。と。ハ。主  
玉。と。も。と。下。月。日。の。縁。の。内。と。大。室。の。流。と。く。と。縁。と。  
往。下。と。大。室。と。見。と。大。室。の。ま。と。え。と。と。ハ。わ。が。ま。す。と。承。久  
の。屋。あ。と。ギ。と。下。と。見。と。大。室。と。見。と。大。室。と。見。と。大。室。と。見。と。

ハ事の迹よりしおた。とひもを折てくらむとそよかすとハ  
やをすがすとぞし。人のいもとあるはす。けいはを折てそ  
既すの迹よりしむ。く。の迹より散れると。かくじふくには  
つるのくらむりくまのせぐるあれと。のうのあうとの玉(く)まを。月日  
縁(ゆゑ)をみて太室(だむろ)。からく。日神(ひのかみ)。月神(つきのかみ)  
すまかう。とまかう。とまかう。とまかう。とまかう。  
めぬきまで。かく。玉(く)ま。五(ご)ら。木(き)。山(やま)。山(やま)。山(やま)。山(やま)  
一(いっ)て天下(あひ)平均(へいひん)せんと。福(ふく)むする  
と。神(かみ)も。シケテ。うきよ。

題 ト ラ 呂

後 咲

トモモのうと世を過(と)るをがとう。にまのと  
おにゆきく。がく命のとくとも事。并(な)くよく  
余(の)すよ。うて。往古の神のとくをりてちむき  
あやし。昔(むか)しの。むかし。三(み)の間の縁(ゆゑ)。并(な)く  
あくよ。何(なに)の  
すぬあん。

のとき、御(ご)の御(ご)水(みず)に付(つ)け。とひも。さくらのと  
風(かぜ)に吹(ふ)きとてわざま(わざま)とく。じきに。えらむせ(えらむせ)にてく  
あらがま。まこと。かく。とく。ほよ(ほよ)とわよ(わよ)とく。ふ世(せ)  
機(き)り。うよ(うよ)とく。かく。とく。ほよ(ほよ)とわよ(わよ)とく。ふ世(せ)  
とく。千年(せんねん)も。まよ(まよ)す。とく。世(せ)は。は。とく。月(つき)と。まよ(まよ)と。月(つき)  
を。ち。を。そ。と。か。と。まよ(まよ)す。とく。世(せ)を。まよ(まよ)す。とく。世(せ)  
え。よ。何(なに)の  
すぬあん。

春日(かみひ)は寄(よ)すは風(かぜ)隆(の)

まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。風(かぜ)を。よつ(よつけ)せ峰(のね)のね  
上(かみ)。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。  
のまよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。  
まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。  
まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。  
まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。  
まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。まよ(まよ)す。

およびよを君よ吉よセテ  
御よもよを告よセバ、まよせられ  
よく寫禁葉よと字うき  
而あひ即ちトの事す。二句、セレハシテ御内酒を、書  
トモトヒタナシ。され

### 宜秋門院舟後

何よくせりて風よくめうの袂よくすまう風  
上弓矢うてくす。弓の袂よくすまうの袂よくすまう。箭  
矢すまうの袂よくすまう。あまかそまハ弓とまく候の前まく

### 述懐古事記葉 俊成

やア前席の御茶の口までちうすりむをと成  
日暮にてすまがおとづりまふ。事むとぞひ  
じ。まよかくまくはてくまくはてくのまくはてく

う事よしむかと。事の光よかと。

題一

宮ゆべ

竹の葉よ風よかよとまくのやのあむと材よく  
竹の葉よ風よかよとまくのやのあむと材よく  
竹の葉よ風よかよとまくのやのあむと材よく  
あむと材よかよとまくのやのあむと材よく  
材よく材よく材よく材よく材よく材よく  
のやのあむと材よく材よく材よく材よく材よく  
材よく材よく材よく材よく材よく材よく材よく  
と材よく材よく材よく材よく材よく材よく材よく  
本よく材よく材よく材よく材よく材よく材よく材よく

まつり。三ちよすく人、まくはり。  
あら手りの深みや。

十八

### 西行

まつり入わの邊の地とすもすやあきり金毛院  
まつりまし入わの邊とすもす。何の處入わの處と  
せてもせよ。へおはなづか。おはなづか。おはなづか。  
まつりまつり。まつり。まつり。まつり。まつり。  
森のきのきのきのき。ほててつまきをすがくとむねは見  
むえやねれど。おはなづかをすがくとむねは見  
死すややんのきをうてとむね。あはん。かくしてあはん。おはん  
ややん。ふと。おはん。おはん。おはん。おはん。おはん。  
まつりまつり。まつり。まつり。まつり。まつり。  
まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。  
まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。  
まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。  
まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。  
まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。まつり。

く入るのよきま  
あわんとく。

### 晩のよきま

### 後半

晩とつナのれをそそがさきくアラキき満のまよ  
上々白樂天。遺愛寺鐘款枕聴。に。上々のまよを  
てとカスく。何の際。今。おもむし。おもむし。おもむし。  
だを。おもむし。晩つまよのまよをまよ。  
まよと。おはなづかはの遠隔なり。

### 西行

### 或子の教

あつましゆづれをもぞれ。水きれをす。おはん  
まぶたの眼をす。おはんの秋。おはんの冬。  
おはんの春。おはんの夏。おはんの秋。おはんの冬。

尔今をひきはりて長夜の眠りにまづまづ  
すくすくと一一向やすむあらまう。そのまゝなまかて長  
夜の眠りぬるが爲り。曉のすみあうておひさまは  
ござ。白日のさとをひくき  
がめどもーうとあらぐと。

百首歌より

土門内閣

うわ山河を尋てのやれし事、半ばよむよむいわむ  
おは・先駆の例を遡て、大抵の事もきこうとして、ほらまかせ、トロとほの  
昇るる陽もあらずすむきがくと、ほらのりむと、よしの風の聲。

百首歌より

後年

もうたよきとねりはらひのねむ  
またわが今のかまとの事、序でやまの者  
そぞりと。物々とふるゝアヤシム事あるがまき。今は  
人そぞりとす。行文もせむ。

て遠きアリとすとおきばとおきとおきこむ  
おとすとくおとくおとくおとくおとくおとくおとく  
おとくおとくおとくおとくおとくおとくおとくおとく

アリとすとおとくおとくおとくおとくおとくおとくおとく

小笠原と月のきみてとの一あとをねじゆく  
二うやまひきうとむかとみたと三うやま世とく彌て。  
えふやまとみたとくせやく序物の事をしてお  
をきや、お毎の縁か。せば世よめじむかと。は世よめ  
あわゆのりへ。せまよかとくよくのうくよくと

もとまくわす。あはれのよきはやねん。身の  
やまとのもとしゆきをす。院司もあらずす。

題一らむ

益田傳

世中を今ものへつぐふ遇す一方そいとひき  
止のうく今こそ世を直れり。身のまづるきどり。  
きやうの時分世を交り。一年月の半を半。兵やりゆく。  
世をいふ人のことあるまことに過る月日をやりとくつ  
じつのかくと應ぜよ。と。ものやくしま  
月日あつて。その力りをもて。と。も。と。も。

アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ

アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ

西行

其いふをたまはとめままで教す身の身もよ  
今ハ世を直る事よきて。身のせよ。やまと。何。身もよ。身もよ。身もよ。  
アシマタシムトシムトシムトシムトシムトシ

故ナレタナの出世の事すてもよせ

生人の物音の事すてもよせ

、オの事をせりとや、奈ほしもしくのなま世へせと  
ナム世中うまいとば遁世するとするあるおおむね遁世と云ふの事  
帶子たゞはまきり一せひてぬ絆してとすうのとあくと  
ハシミ葉やくわく葉と輕てちかくの葉とゆゝせん

初句三タリやも例のい團

字あうるを自在トモテ耳アハタニヨナキ。玉繁風雅と云ふ字  
アキとあら作手の下まるがもあれど。字あうるの哥トシキギと云  
え。初とおきて二タリやほももしくかとふとく。秋鳥の頃。  
けの哥とおきて二タリせふもと書ことわくとく。左  
側。出うと化多を行きこやハラル本ムヤカトシモを  
右側。文氣と行。義繁じるくもれ本ムヤカトシモを  
サリムカトアシ。ある本ハ用ひきトシモ。ハシミ

トヤハシノタマシタムシツシテシテシテシテシテシテシテシ

ヘア・失用トクナムヨウアムト失用トナム。ガモヤ  
スガシモトアセドハアの改めんすにナキ。ナカタ本アシイ本ナヘ  
トシ。アカシモトアセドハア。ニカヘテアカシモトアセドハア。世ノアカシモトアセド  
軽ひやく緒ひのアカシモトアセドハア。世ノアカシモトアセドハア。アカシモトアセドハア  
トシ。アカシモトアセドハア。アカシモトアセドハア。アカシモトアセドハア。  
トシ。アカシモトアセドハア。アカシモトアセドハア。アカシモトアセドハア。  
トシ。アカシモトアセドハア。アカシモトアセドハア。アカシモトアセドハア。

二句せよあくまつ等  
おもむけりす。けふすすめとどもせぬる  
もふ物ふらる候。まよゆきのま  
かくとくれ。まよゆきを怪なる。まゆきのま  
あくとくま。あくとくま。あくとくま。  
あくとくま。あくとくま。

、何事よ。あくとくま。あくとくま。あくとくま。

すくとくま。すくとくま。すくとくま。  
すくとくま。すくとくま。すくとくま。  
すくとくま。すくとくま。すくとくま。

入道赤闌白雲歌序

いづくはれをひく。いづくはれをひく。

かくとくま。かくとくま。かくとくま。  
かくとくま。かくとくま。かくとくま。  
かくとくま。かくとくま。かくとくま。  
かくとくま。かくとくま。かくとくま。  
かくとくま。かくとくま。かくとくま。

かくとくま。かくとくま。

百首歌序

慈圓傳

かくとくま。かくとくま。かくとくま。

かくとくま。かくとくま。

題

宋達

かくとくま。かくとくま。かくとくま。

身のうちもと葉のせをかじらば。身やよきわゆ  
かくさる。身にいたるは人へ。在俗のもの

かくさる。今いとあそむりやすら肩組とぞうりてん

されりあなれし。あはれ。身はのするをせし。身するが  
あはれ。あはれとらはぬのものあはれ。身はのするをせし。身するが

まんは整事五十首。源師先

すとて、うとくよかは。一。身の身をよとせを  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。

題一。八條院高倉

身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。

西行

身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。  
身の身をよとせを。身の身をよとせを。身の身をよとせを。

寂蓮は師人にして歌よきをばあへいさして  
西行上人哉へ越野とてとくをすそを後、  
もれもくへんじて道をそらの世の本から  
ぬりのよきよまけ致ども。越野別名  
三位後事と人侍て。港、使、後事、ば生まつて  
せざとしのあまく、後成での面を拂ふと後成でぞ  
候とす。じうてこじはハ神意もすりとおて上人より  
教わるきをくせんとよきよもとづるがゆふる書付のう  
あの事と世よきがむすす。爰々ハトモにキほ  
あまくハ望風ともハ、うの事と絶はれど、よとふと一そのき  
何事せやうか。未だハ、いはれ、御の事と云ふ。御の事と云ふ  
ナハ、女くハ、うとて、もの事と云ふ。御の事と云ふ。御の事  
は、時まハたよろちとすりとみる。うとひむりあらわりあらわり

よしよき。

千載集えりて待候時かまく人の歌を足て

後感

ひまくあくよしやわんじよかく、ひまくよ  
三々井下とて井かくよしよかくとて、三々井  
は、むくと。さて、みれいなねく、すうて、み  
いねくと。すうて、みくわくを、ほんくとく。

崇徳院よ高き御葉うふ常

葉をわくつむとよしむとよき葉うふ常  
葉のうふ常とよかくつむとよき葉うふ常  
葉うふ常とよかくつむとよき葉うふ常

可喜よ

或子の歌

まよひのうらわ世へかへすの事原のあはれに  
扇子もあく多めのゆきすりあへせし化けを  
よふ風乍らかわらむとひがの今風にあ  
はるゝ嵐の吹きてもうの風とて世の人の  
のうしづきの風とて世の風の吹きすりまよも  
よほほきすりす。今しきえんじゆくのうの風  
にまゆ世へをゆくよとてまゆうふ。風  
てあやかみのうす。あはれやまゆうふのうの風  
くちくちくのうす。俄かはまゆうふのうの風す。すて舟  
一首の歌よ

神経歌

大情けの附物はそぞ神言

櫻 改

神見やかの内のみゆがめ  
三回句、天照大御神は神見は天見屋命と奉じのま  
ひまつぶ結くと大いのちいつまくみゆのま  
せきつとくとくかとんおとんへくのゆくこれ

有へき

琴と附外音と定家羽

一ノ ありて是より内の事より其をせまつたりてたゞ  
又廟と云ふと曰ふつゝとて一ノ内行す也。此  
にたゞ御言の事とておありてはうとす。而  
一のき縁うありて。又内門をもつて。又河を  
ふうりをうけて。大神のうちを。方々までとなまん。

太神宮 神中よ

（以下各節は前文の註脚より。）上よ大神宮哥倉主を  
（此後大倉の内號あり。）今その字前大。

（前略）

太上天皇御歎

キサウや神須の山よ雪をこみて。御室ひいて。し内室  
拘うや。御内所。並御す。二年も下。御内所の  
心條り。御内所をす。は、謹。うしむして。天の下。政  
御内所は、御内所をせり。御内所を。御内所は、

（以下各節は前文の註脚より。）此天皇の御内所。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。  
（以下各節は前文の註脚より。）此天皇の御内所。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。  
御内所の御像。そ。北條。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。  
御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。  
御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。御内所を。

鄙一也。 西行

一 宣徳三月岩野より北へゆる日の古事記

上句ハ後門也。下句も前門也。左門也。右門也。五句ハ。  
大後門也。天の門也。にの門也。トトロケテ。あふ。レバ。左門  
本文や後門の字の義ある。ハ數の字の義ある。トトロケテ。右門の正門也  
が。アリ。トトロケテ。左門也。右門也。左門也。右門也。左門也。右門也。

### 神河肩口也。手口也。足口也。口也。口也。

味手也。教手也。神手也。手也。手也。手也。手也。手也。  
手也。手也。手也。手也。手也。手也。手也。手也。手也。手也。手也。手也。

手也。手也。

一

信方の月夜の行。あて。力也。と。よ。

かくも。龍のまつわ。かくも。かくも。月の社

アラモ。天の靈籠。アラモ。佛の事。アラモ。信  
のたの事。アラモ。佛の事。アラモ。信。アラモ。佛  
の事。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。  
アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。  
アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。  
アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。  
アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。アラモ。信。

### 神能

無事也。傳也。

や。ハ。シ。先。あ。ま。る。神。か。く。ま。先。あ。ま。る。神。と  
月。の。い。と。い。ま。う。神。か。く。ま。先。あ。ま。る。神。と

氣のあすらむと降光といふ  
りとゆふやあん。

よしわはてえちほひにじのひまを

牛院入道をも

ほくひめとくのがまかほく門の隣の山

トヨキミ

入道お園白雲高昇と成る

神風や五色の川の宮をいくとすにはけりゆ  
写すし、よむはて、よほゆよほく門の隣の山。

辛首歌より附 越前

、井見や山田の原の林をよみうぢあをうみ白雲き

井見ハ佐賀の也門すると辛首歌より附山田の原をつぐはせらる上す  
も。ち例あり。下へはくはくと申されをうむあるといふすうり。

社頭納涼

大中房明親

あそび川をよみうみの林の原をよみうねの久見  
室やよみうみの林の原をよみうねの久見室林の原をよみ  
くをつちとある。三つのつきをある。おもへりきりよ  
いじき。下つてわく神のさくいひをうたはず。  
きの神のさくの下つてわく。おもへりきりよ  
のねとく。下つてわく。おもへりきりよ。おもへり  
く。あそび川をよみうみの林の原をよみうねの久見  
室やよみうみの林の原をよみうねの久見室林の原をよみ  
くをつちとある。三つのつきをある。おもへりきりよ  
いじき。下つてわく神のさくいひをうたはず。  
きの神のさくの下つてわく。おもへりきりよ。おもへり

たるへとれども教作の事きかず。  
あまきわらうりてむとむ。

二九

八幡宮の松下にて 檜御本とて もとを事を恒  
てひ神樂の夜まわもて 松よしといひは御多<sup>ハシメ</sup>  
參の夜のとく 間まの夜まわもとと者れ  
まほなまわすのむきとくわは今きは。

は下成は

林やくまのいふひきとくれは神よもろそりぬ想を  
二句ふすもゆといしりきらむつゝのうれしもあ  
うきくもとあるくとくとたまめくとくとくとく  
文は六年一萬人内屏風の上にはまうりす

信あて

月にゆき川よ歎みて冰よもく山あわの神  
くもみて、山藍の衣きらる人のまの月すもてじつ  
る。あわの神へ山あわとふまもく跡すと拂ひ衣いとゆ小忌  
のまくまく祭はる。神樂は惜かとがの除財祭よもくもく祭  
のまくまく祭はる。二月の水のぬくみゆが  
よ。かわ山あわの神の水よもくとまく水は安  
ふの水よもくとてたゞがぬりとあらて。あらて山あわの衣  
とうなるわゆる。その縁よとくもとくふくとく  
のまくまく和ひとがりよ人形うじうじ。小忌表  
萬葉様子を山あわて木くねだらうとくとく。

社頭雪

按家は八通

ゆづこの風ふれりもとあはすを白叶ふ青色枝也  
ゆふてより拂ふ本候とづるやう。  
今來をきりてつるはま速也。

十首歌合と神祇 美因大僧正

天をいのちのものもとくまよどとの社のあめの玉垣  
下句あきの玉垣のやといふをす。古唇よあきをと  
いじ漢文よ赤心そとせせと舟深とふし草。  
もろのととじあきの玉垣あれも赤心とよも赤やとよきと  
よきとよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと  
みあしよまわせはつてはせりわせりわせりわせりわせり

よきよ

賀茂重保

跡なむ神よあきのすらせへ何よだのまをうきて過る  
ととて神不遙るといふと佛は圓ち。あか神は世間行  
ニミル神のめぐれよ逢日のすらせ  
とより。うきとよきのゆの内。

待て貴舟不すありてあるもいひまほいす  
ある

笠置草平

やかぬのうりふはりとまうて安せきよ、河上の神  
たぐい内がむ神の店へ。安せきよ、河の水を田をさきとす。河上の神  
まねの神へ。夕づきあせきよ。せせく。かせきよ水を溢れさせ  
田(サ)一入  
〔モキリ〕

鴨佐の歌合と人ぐまむらの月を

鴨長明

石川せせく小川のほりしと舟とすくをひくねて見し  
ほき不をすもす  
月のしもす

文徳年吉入角席風春日景

入佐右衛門政久に

、やまうらの神のそとやあひれとてよ波ノ川を下の河見  
きのすいへとくし。神のるのをくやすらむ。

さと波打ヒハ風よ風のまくら。波のまくら。

家宣嘗致むらむる財神社

、天の下三皇の山のたすてなみど方をきよとまわ  
物々とあむとく。  
おとせの縁へ。

後感

春日野のやまうはなのまゆれ木本やま神の章やわら  
初々と藤原氏のと二分とくのあとふき。大にと棘路  
三ケと我のじつかれど下りて我おとされ

子孫だまうく祈るよなあへて。榮え一めよと

ほ子定家ア申幼子。ほ孫の義太翁もとおハ木の流れの木と  
再家の事ハけ引の義慈ちよにゆき。おハ木の流れの木と

リ小緑わくとせしよくの縁す。

寂勝四天王院障子に小山書下

大僧正義房

、小山山神のとくをねの紫ふ紫——とへうへもわくと

神のさすとまことしりれり。ええきの底くもる。一そのき企出  
沖の徳をまことまつ供をねの紫ふ紫——とへうへもわくと

日吉社おまう奇の牛トニシと

おとすの前をやかとてくわうなまき本の光ハシナカ。まあと  
日枝の山上トが生すといふ。其堂の某佛三昧の本也とおぼえまし。

## 迷懐

このじせの社のいはせかげのむのむよみか  
せの社日吉山寺なり大宮二文字をす。客人大僧師三官八全ふおもひ  
もき木綿にてつらうさき。神饌古幣ねりとくにゆきあらる  
めくは生と、小なりあり。富士山・新潟・福井・佐賀・長崎・  
山形・福島・岩手・宮城・秋田・山形・上野・迷途。二そのまへ前が山  
季社のちりと射てかといひ。うわんとし外れよ。

わがて日中のあくづりぬ。ふくらみあやしきのふく

縁引みわす。一そのことこゑまほて今本もうすへ。我  
をくわす。虎は迷写と。のくわす。日中のむ光同布のが  
そくはと。洞あやさきのふくらみと迷懐。くわす。きのふくら  
とく。あくらふき。へやる日限。わく後。只けくわす。ふくらむと有  
況。本草としてふ細といふ。わく。序。津やのぼけ。易の居た  
めよ。ね半と。者あくで。大半すくら。時。月吉よ。うれして。往  
はる安へじがなき。一宿の歌を。下のトセよ。まのむすと。用

する。一そのと。日中の神の。朝世。おもて。す。ね。旅。六毛。むろ。な。金。ま  
を。其のきふえ。も。らう。き。め。る。と。自。と。あ。や。と。像。の。う。き。す。と。也。  
或。も。よ。ば。無。比。と。ふ。き。と。い。て。ば。す。は。と。ば。比。の。ま。と。い  
ば。う。と。ふ。き。と。か。と。も。い。う。う。の。わ。し。う。う。ひ  
さ。う。い。と。と。

迷ひの。ね。ひと。の。ま。う。歌。不。か。ア。マ。ー。シ。テ。の。ま  
ひ。え。の。サ。ク。と。湖。よ。き。て。山。ほ。の。ま。と。不。ト。の。社。の。鳥。沈。  
え。え。か。セ。車。御。と。い。ふ。も。う。の。ま。う。今。と。ま。は。う。や。あ。ん。ト。ソ。う。の  
ね。い。と。ま。は。う。と。も。そ。う。も。い。め。ほ。く。と。ハ。う。大。龜  
へ。か。と。思。い。し。る。山。の。匂。ほ。く。よ。う。き。て。ま。と。も。ハ。上。の。ま。う。だ。な。と。ハ。原  
一。き。と。い。ん。よ。ふ。納。あ。る。へ。う。と。ぎ。れ。と。も。ハ。上。の。ま。う。だ。な。と。ハ。原  
な。免。モ。報。賽。の。う。か。す。や。は。ら。と。後。の。わ。う。の。う。と。い。て。が。わ。う。の  
も。ち。た。る。よ。も。め。た。る。よ。わ。一。き。の。ま。ほ。く。の。社。と。も。し。め。う。ふ。ス。半。の  
神。力。と。我。く。り。と。れ。て。又。去。て。よ。も。と。似。つ。う。り。と。そ。て。ハ  
人。す。ー。く。わ。ゆ。り。と。と。又。去。て。よ。も。と。似。つ。う。り。と。そ。て。ハ  
て。も。か。と。離。り。あ。き。う。う。と。と。ち。下。て。山。の。歌。で。ま。ん。と。似。つ。う  
く。す。と。う。す。て。迷。懐。の。歌。と。お。ぬ。あ。う。美。き。と。ま。ん。と。う。う。

心跡のよそよそしきふ

はめねれにむじあをせわをそかし。つうのア(ア)の愛  
上々或れがれの山の上、豪家(ひやうけ)の後、もひやうだ  
じの事(こと)がくみゆび(みゆび)歌(うた)やとくす。ほり直下(ましよ)  
圖(ず)書(しゆ)がくとみゆび(みゆび)之(の)細(ほそ)き(き)難(むづか)し。うら虚(うら)處(しよ)居(ゐる)  
の三つ(さんぶつ)トモセ(とま)せくと(とく)べぐ。管(かん)絃(げん)太(お)きの正(まへ)歌(うた)アハバ  
一首(いしゆ)の主(しゆ)大(だい)神(じん)のアハバ流(ながれ)て、ひづ(ひづ)かりし。もとせ、差(さ)

魅(み)野(の)ままであり侍(し) 太上天皇

、岩(いわ)アシマホヤヒナす。三魅(み)野(の)の山(さん)のう(う)あらけ(あらけ)あ(あ)か  
古(こ)一首(いしゆ)の主(しゆ)岩(いわ)アシマホヤヒナす。山(さん)のう(う)と(と)だ  
ナオホ(ナオホ)アシマホヤヒナ。山(さん)のう(う)と(と)山(さん)の里(さと)のゆ(ゆ)

新宮(しんぐう)ヨリアツテ魅(み)野(の)川(かわ)と

魅(み)野(の)リ(リ)ク(ク)次(シ)モヤセ(モヤセ)ミタリ竿(たけ)キ(キ)ミケルね浪(なみ)の五(ご)瀬(せ)

ミタリ竿(たけ)キ(キ)ミケルね浪(なみ)の五(ご)瀬(せ)を(を)もみ  
よ。魅(み)野(の)川(かわ)の下(し)の波(なみ)の波(なみ)の波(なみ)を(を)もみ

魅(み)野(の)奉(まつ)宮(みや)統(とう)てキ(キ)の力(ちから)遷(まつ)宮(みや)侍(し) ト(ト)

典(てん)元(もと)六(ろく)ノ(ノ)ト(ト)き(き)うら折(さく)もあ(あ)い(い)ね(ね)ト(ト)もみ(もみ)神(かみ)り(り)美(み)の室(むろ)

上(じょう)う(う)ハ(ハ)造(ぞう)営(えい)す(す)と(と)だ(だ)す。うち上(じょう)ハ(ハ)り(り)未(み)の半(はん)と(と)神(かみ)も(も)れ(れ)ま(ま)す。  
けり(けり)山(さん)の(の)ひ(ひ)あ(あ)り(り)あ(あ)う(う)と(と)あ(あ)う(う)し(し)風(ふう)久(く)の(の)半(はん)と(と)下(し)よ(よ)か(か)で(で)の(の)ま

禊(みそぎ)教(きょう)母(め)

五月(ごつがつ)うち雲林院(うんりんいん)の善提(ぜんてい)謙(けん)よ(よ)く(よ)く(よ)

肥(ひ)後(ご)

しほきの雪のはやをこもせばよあらのたまをわ  
せああさうのたのじ。一首のさけあみの雪のまくあつまくかねを尼殿  
涅槃經下侍と身度よじもどひの木と全すあ  
た次ら寺齋の室とあて人のを仰ぐひ度のうちよ  
送りとがやえゆる奇 涅槃とハ佛の入滅のり。ちうたとがた  
るなり。二月半の日かれ折りとせ有。  
上下こうう寺齋の奇をくへのれ。

、翁のなすトもくすとゆきハキキ力のうけいじぬ  
佛の入滅ハうそのまつて。实ハ終来常住といひ不生不滅として在あふ。本  
在う等を翁のれのうすトもくすとゆきのほりなどもすじ。

述懐

ねくと金下 圓鏡よどみてうわせまほの灯火

わくとやせまとさうあもす。は難ふだくと  
んぐとわうへくし。うきはうすふ  
人々とわうへくし。うきはうすふ

おほほきの白露。よめきてつとめては。しよくと  
本多。うむきのふみよ。あきとじよ。よ  
ほほきと。夜のやくねきと。いしてのぬとこと  
たこと。金事をせりふとすり。急る事と。とねを。つとも  
て六門切。勒りのまと。胡成。わふ。わふ。わ勒りそのよ  
死し事と。世ふまわひと。かへじくと。けほく。勒りの方の  
跡。かへじくと。かへじくと。かへじくと。かへじくと。かへじくと  
そつとてよじうへじくと。かへじくと。かへじくと。かへじくと。かへじくと。かへじくと

され成るやく受かれ。近きよ聲々あはれ流へいうらと。一首をハミ  
内法をきて、よりまきゆて普陀勵りしと。あ頃ハ士人半をわざせ  
よえどり厭離穢上欣求淨土の義をか。又下をせん不定の義とて。亦  
死生をもう離キ半とせんが事ととす。されど三言五つとも起居  
てつじふ。あすまんとまくとまく事とせり。どど残す。そ  
へき魔物アバガラヤウゲダボナキ物ナホの流やまん。又こまくそ  
めあとふとさし事をテレハナリ。聞けり。たゞやふとお行  
もれし事も少く。あはれて室じて。まわらしゆりとたとハ雀の十年處  
も代とて人を殺して。天よりん事とて。おととく。千年萬代と云  
玉虎さんとわざいゆふとまなむ。一例ばかり。とく事とわざいゆ  
シカわらひやうが事と。かくとまく事と。  
やじた。はさんとてわづか。とてハラス。寺。事の字の有す  
た。うす。されと。座房は寝氣あり。世をうきゆよせひて。ねよ。火葬  
下。坐念するをやうふ。志を全とし。お方まる。院房急ぐるがく。ハ  
後世の樂果をと。卒業するをやとせ。後事とわざいゆ  
かく。まきばれり。ゑあるす。寺の字ある方萬叶入。とくとわざいゆ  
とよ。まくとよ。アトモハ心筋の義。又勘川の義ニ矣と矣だら。  
れ考るとして。寺の字を。信もつて。ト。

### ・社樂不至とあく印きつと文ひのーのあくとそくとまし

或抄。ば哥ハ淨土宗の他力の本別よ宗。て。性生極ま。とるやあ。才。自  
力の觀念をとて。即身成佛の樂と極む。アリとて。佐吉の  
人民と抄。よ。家の大あれ。ばらまく。上句。觀音菩薩の觀念の未  
成就する。定ム。と層石。赴く羊の一歩。もよ死のらう。半。人の余  
のすかきだ。と。一のとハ。あん至心か。はる故。持歩。も。う難。半  
とて。觀念。アリ。觀念す。成就す。き。げ。なき食と。六一。公通と。

### ・觀に如月輪若在輕霧中。のと權僧。立胤

・まくまく。まく。まく。状霧。ト。わのり。ト。まく。有。あ。け。の。月  
金剛界後軋。復必白言。寂勝尊。我不見。自心。無心。爲相何。諸佛威告。憲相  
難測量。授典心等言。即誦徹心明觀心。如月輪若在輕霧中。如理諦觀  
察。有。まく。心の。こ。ら。そ。ん。と。や。く。徹。への。ゆ。と。小。咒文。と。涌。と。觀念  
す。れ。月輪の。う。す。旁。の。す。あ。う。ゆ。と。り。小。本。文。と。引。と。そ。の。と。密  
心の。ト。よ。ア。と。と。て。も。く。そ。う。の。相。ハ。と。ふ。義。な。り。

### ・家。首。の。歌。ト。け。う。四。十。界。の。下。よ。仰。に。縁。覺

れく山あいもわきせす。ほとわづま。常ひきよと風よ深そ  
顯の十界。佛と菩薩と。緣えと。眞間と。天と人と阿  
修羅と。餓鬼と。畜生と。地獄と。二の身。縁えんを獨  
覺ともふ。さすも。自利のまこと。他化の功徳。下りて。毛光落  
葉とも。普常と。放まよ。ばたかせ。ナニ因縁よ。ふ。縁えのう。

心經の文をよる。小侍従

、色のには。一の身の事。まじめ。のり。さ  
くは。身の事。まじめ。是あくわざ。文字のまじめ。わらへ。そのまじめ  
と。身の事。まじめ。を。うき。と。まじめ。落葉。まじめ。落葉の縁だ。まじめ。落葉  
の。じき。まじめ。と。こ。

極改安百ぞ歌に十樂の名よ。むろに。霞

未迄樂

寂蓮

紫のすらりはす。夢のきよ。き舞は。金眼鏡  
止く未迄の善薩のあま。まつは世を忘。歎く  
きゆき。げやと。かねの縁を。むかうき。は凡  
琴のも。縁わら。ふと。母のあよ。き舞は。ふと  
と。琴の花鏡。鏡す。を。うて。父。うか。よかつ。と。垂  
ねずれる。や。れ。岩のね。はす。まつ。きのあよ。と。お。二首のき。岩のね  
れ。ば。岩の。西。ゆき。まつ。お。未迄の。壁。のあよ。と。壁。まつ。お。岩の。ね  
まつ。と。う。と。そ。の。き。・  
お。お。の。上。お。と。ほ。よ。ま。人の。を。琴の。き。岩の。花  
う。よ。し。ば。せ。と。ま。か。と。ふ。き。ま。と。く。れ。と。ほ。ハ。と。ま。ま。う  
1. 岩のね。お。琴の。き。よ。と。い。と。ま。せ。を。又。お。お。お。二首の。お  
拂ふ。と。ふ。と。そ。と。う。と。ま。え。た。り。又。お。お。お。二首の。お

カヘガモ行カニ湯木トモムアシナヒ。前院東  
近の處のあくは世トテノ在風モトシホミニ。三十六  
年六月。

### 進奉物用樂

シカシテききの外の音をひこれのとやとせあきの坐  
題を極乐の音との因よシして、またのばくを同多  
けのふこの陰院ト佛菩薩本尊も、いざを死後事遠ふといふ  
はて極乐より舊せしむる時、まぐの生度付めて開く。前院物用樂とて、シカセこれぞの  
とふとのとかのとくふとくあり。うすすま本多アハ、うへ波也得  
かまよ。うのとくさきをととのとく。此  
开くとがま書の外の音と極樂の音とくよ

て、極樂の音と始てこそ、これが常とならず、の極  
乐の音とふと、下句もその物でいふ音とだ。  
喉の戸と嘴とあきと鼻とよどて、口と鼻と  
有りとあらかれて、がの  
ミテスゆゑをくわん。

### 快樂不退樂

春休すうきあひによくあひねはひうつて、あひも  
上うそ。極樂の音と不退転とたゞて、不退とふ  
うきあきギ。極乐ハ無事もあらず。このうそ。來のあひの不  
まばく。も不退転ふるべ。世中のちうれはきなう。この哥のとて極乐の樂ハ  
や。の半セキアリ。極乐ハ無事もあらず。春休としむたの樂  
アリ。わらうきへと死別もうとしむり。

引接結縁樂

立くすらうき海より綱つるさきえよそひじくわ  
上名アシカ。佛米穀國度人天スとて文ムニのきとてそいを  
綱つるとけり。立タムよなナムたり。ニタム。生れの苦病とふ。妻婆と妻の  
縁を捨リし。まよもら利他の義ハ極ハシマトトく。まゆもら  
縁ハ自度シテするのまよす。人を度シむ。まゆもら  
縁ハさき縁ハを方カタ度シとするとこすり。世セを生ス。思  
ふき縁ハを身カラ度シとするとこすり。世セを生ス。思  
知識隨心引接とはを要集シムる。うらぬわ。うらぬわ江  
よ縁ハわなを。いくは綱つるよ。うらぬわ。うらぬわ  
十樂ハシマのめ。十樂ハシマのめ。は生ス要集シムるま  
よ。一音ハシマのま。極ハシマトトく。又要集シムるま  
よ。縁ハさき人ヒトをよせて。度シす。よ。

は華經ハナケイ八氣ハチキの哥ハジメと仰ハクる。方便是唯直樂  
はのうを

慈圓大僧

うくよしほをうねばやあと室ムロと見ミよとくクぬ  
題ハタチの文ムニ。十方佛事。唯真乘ムニ。二亦無ムニ。あわ  
ゆのうと同様ハシマのキ。如風於室中一切障障ハシマ。是ハシマとく  
文ムニもて。まよく風ハシマもくまて。めめもす。まよく  
ヨモミとふ。食せたり。言ハシマく。いつまは  
をくねほ。おきかよ。あくとくえハシマ。

化導禽ハシマ化佔大城郭

此ハシマよ。世セの事ハシマ。あくとくやとくす。もあくとく。

うふよとづきせひてすわらふてふくは  
ましめひてこくをうしなよは實も寫ばむと  
ま車をほ華経をうなてます。或ゆ花譜紫泥  
と化るといふ。義なりだ。(花實をりとよくとつれて上に人)  
くつれだと五百ゆ旬よりき山河の半ようちの果をあうて  
ゆくゆくとくわせんくへいひてつくりをうなて。時  
乃す師入もくはうの珠うち全二るも半ゆ旬よりて實の  
宝石の珠よつとくとくらう。も時の法今ハ安く二う  
十ゆ旬をうて。実の實で西着たり。くのゆく声圓と字  
ありて。をまかをいともぞ。種實果を遣せさせうひて。もは實  
大君のほた絆をうて。即身成仏を能せさせり。小主とちあ。  
げたとくちりけ哥。やのふまとほ半。もとうだけ  
とうり。

かよとののとく。

分別功德と或住不退地

龍の山をまくはのをまくとくねぬるりとまき  
弓の山とは華經を復すとくとくね筋と顛の  
不退地なり。山とくとくねりとくとくの縁の角へ  
一きのまくとくね筋とくとくめほのをまくと  
外よろひとく。

意心念不空過

仰りてもうき度とゆかのまくはめほのを  
仰名及見身心念不空過。能滅諸有苦とくとく  
の素す。名とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

婆婆の奉公儀を上々と経文より書きことあれ。もの文  
とりは翁なり。の書字よりて之が美か。也。じゆき率といひ  
て。絵句の書て。うか。あ。せら。ら。も。う。た。ほ。り。り。い。わ。れ。ん。け。れ。む。め。本。文  
い。ま。う。半。す。く。ん。に。の。ら。と。心。念。と。と。ま。す。よ。う。さ。う。と。お。ち。く。と。ら。り  
整。り。け。ま。の。書。と。頼。る。の。感。想。と。と。す。よ。う。て。旅。藏。諸  
有。善。の。た。と。こ。ち。う。キ。を。へ。れ。と。は。ま。の。や。草。樂。の。と。く。よ。え  
な。わ。り。し。ま。え。ね。歌。と。わ。本。久。ス。ウ。ト。ア。マ。ヤ。ス。  
引。き。後。あ。る。す。だ。

家。と。首。歌。説。と。す。う。う。向。立。旨。の。と。妙。觀  
察。智

入。道。並。開。白。を。改。存

、底。ほ。く。ふ。う。大。と。と。あ。き。す。う。は。い。わ。の。達。と。し。年

五三位經家

、け。と。と。て。あ。世。や。い。も。ち。ハ。ほ。ま。人。づ。命。と。せ。え

本文。我。等。敬。信。佛。當。着。忍。辱。金。為。說。此。經。故。忍。此。諸。難。事。我。不。愛。身。命。  
但。愛。無。上。道。我。等。於。未。世。護。持。佛。所。屬。之。そ。う。と。と。の。ま。い。ゆ。き。  
け。う。何。や。と。も。あ。き。ま。か。く。わ。す。く。け。く。う。と。不。起。今。下。け。れ。ま。  
後。者。セ。ん。と。く。

け。師。口。加。刀。杖。瓦。石。念。佛。故。應。忍。の。心。

寂。連

ゆ。き。夜。の。冠。う。つ。あ。、あ。す。あ。ひ。豆。世。と。の。ま。た。の。み。う。

初二ノ如力杖毛石<sup>トモ</sup>（本文若說此經時。更入惡口罵。勞杖毛石念佛故應怒と有。  
三の如ノ如忍<sup>トモ</sup>（忍の事を忍<sup>トモ</sup>。字義の如<sup>トモ</sup>）下ノ如ノ念佛  
故<sup>トモ</sup>（如<sup>トモ</sup>と云ふ。一き世をのき<sup>トモ</sup>ハ、二き世をほ<sup>トモ</sup>すと云ふ。  
と云ふよ<sup>リ</sup>て結<sup>トモ</sup>ハ行<sup>トモ</sup>の事<sup>トモ</sup>。忍<sup>トモ</sup>の事<sup>トモ</sup>を  
いふとて。辛いひつゝ題の忍<sup>トモ</sup>をとるか。也。  
辛<sup>トモ</sup>。忍<sup>トモ</sup>をとるか。也。一き世をとすか。二き世をほ<sup>トモ</sup>すと云ふ。是  
結<sup>トモ</sup>ハ行<sup>トモ</sup>の事<sup>トモ</sup>。忍<sup>トモ</sup>の事<sup>トモ</sup>をとるか。也。忍<sup>トモ</sup>の事<sup>トモ</sup>をとるか。也。  
トモ。題の忍<sup>トモ</sup>をとるか。也。忍<sup>トモ</sup>の事<sup>トモ</sup>をとるか。也。忍<sup>トモ</sup>の事<sup>トモ</sup>をとるか。也。  
とと<sup>トモ</sup>くとあらわ<sup>トモ</sup>。一<sup>トモ</sup>研<sup>トモ</sup>本文の意<sup>トモ</sup>の義<sup>トモ</sup>。し  
とと<sup>トモ</sup>て佛經の文<sup>トモ</sup>をどうぞ教<sup>トモ</sup>へばまことにあま  
よ<sup>リ</sup>き<sup>トモ</sup>あす。と<sup>トモ</sup>りう<sup>トモ</sup>とき<sup>トモ</sup>すけ引<sup>トモ</sup>か力杖毛石<sup>トモ</sup>

但<sup>トモ</sup>御<sup>トモ</sup>存<sup>トモ</sup>す。

### 五百弟子<sup>トモ</sup>内祕<sup>トモ</sup>善薩<sup>トモ</sup>行<sup>トモ</sup>の事<sup>トモ</sup>を

慈<sup>トモ</sup>大<sup>トモ</sup>僧<sup>トモ</sup>

ソヘの塵<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>  
上方<sup>トモ</sup>、<sup>トモ</sup>秋<sup>トモ</sup>遊<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>東<sup>トモ</sup>印<sup>トモ</sup>園<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>北<sup>トモ</sup>そ<sup>トモ</sup>に<sup>トモ</sup>含<sup>トモ</sup>經<sup>トモ</sup>を<sup>トモ</sup>説<sup>トモ</sup>  
以<sup>トモ</sup>て<sup>トモ</sup>富<sup>トモ</sup>羅<sup>トモ</sup>小<sup>トモ</sup>室<sup>トモ</sup>は<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>お<sup>トモ</sup>て<sup>トモ</sup>も<sup>トモ</sup>聞<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>お<sup>トモ</sup>づ<sup>トモ</sup>す。  
不<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>な<sup>トモ</sup>に<sup>トモ</sup>經<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>て<sup>トモ</sup>内<sup>トモ</sup>祕<sup>トモ</sup>善薩<sup>トモ</sup>行<sup>トモ</sup>外<sup>トモ</sup>是<sup>トモ</sup>現<sup>トモ</sup>  
聲<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>金<sup>トモ</sup>葉<sup>トモ</sup>園<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>は<sup>トモ</sup>わ<sup>トモ</sup>し<sup>トモ</sup>や<sup>トモ</sup>か<sup>トモ</sup>れ<sup>トモ</sup>  
よ<sup>リ</sup>。また<sup>トモ</sup>わ<sup>トモ</sup>ゆ<sup>トモ</sup>善薩<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>行<sup>トモ</sup>祕<sup>トモ</sup>す。と<sup>トモ</sup>お<sup>トモ</sup>だ<sup>トモ</sup>す

今すうは文首歌とほひて二玄作室督

如螢火

宿松

かのくらむほりをそいよりきつる夕やの風  
頬の三乗もあゆくゆゑとすば二ふふすもす  
智暗夜の螢火のやうにちゆう歌のけりとの  
小雪をかくよどみやの雪をほむた祭の月の  
けりをかわけてうし止まゆゆ祕菩薩行とせりと  
そだ木の月をとすと螢火はすがれしすまの  
くさやとすの螢火の光をとすをとひむとす  
獨覺のまをとあるべ縁尽を獨覺ともとて

一その色りうりとうぶれを物乞はげまきす  
おふぐくのとくのとく。

菩薩法涼月遊於畢竟室

雪としてしす畢竟室とすすきせすをめく月  
菩薩法は涼する月のやうと半朮をすもと  
衆すよしとく。

旃檀香風悦可哀

あくまくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
比類を歎歎のほた経を洗へとすけと寝と爲とす  
虎の心何とぞはくやもむけぬのあくまく

二三二十五と次第一にて。以降見ゆる。即ち  
月と日と月と日と。月は日月輪也。佛のは  
月を洗へとせし事も。月は輪もあらず。即ちと  
て。文殊のすくもとは。今般が佛也。即ちと  
して。月を洗ふ事もすら。月は今般が佛也。二三の物  
え音が本ほどの縁也。たゞうらむ事無し。

### 作是教已復至他國

や。ある。また。と。と。と。紫衣。に。きて。妙門。の方。の跡。の。あ。居。  
顯。が。身。量。と。心。の。文。と。毘。師。の。跡。と。と。毘。師。の。す。と。  
ま。を。あ。わ。た。と。て。他。圓。と。い。ふ。と。す。と。する。事。と。

經。を。じ。き。え。て。と。る。一。經。の。大。累。は。歸。り。り。教。の。よ。と。の。あ。で。  
と。う。り。と。か。や。う。り。報。應。を。潤。て。れ。を。あ。と。る。お。毒。氣。を。く。そ  
そ。ん。を。の。ま。す。も。附。り。や。も。も。を。み。く。と。わ。く。と。き。我。は。他。圓。り。ほ。て。  
子。の。や。く。復。そ。つ。う。て。ま。う。父。不。死。だ。う。と。き。く。と。ば。す。ら。く。を。考。て。  
う。の。本。と。の。そ。だ。ら。か。う。り。と。ま。く。と。毒。氣。を。報。應。よ。と。な。教。へ  
け。牙。尖。の。本。累。を。物。父。父。の。あ。を。身。ひ。づ。き。と。と。經。の  
よ。と。の。頗。圓。の。よ。き。と。と。わ。く。一。上。を。わ。く。と。と。う。へ  
二。す。り。く。と。す。せ。や。も。三。の。匂。は。是。好。良。藥。今。留。在。世。可。取。眼。勿。憂。  
考。と。と。と。と。相。用。而。と。寫。う。き。と。が。う。年。ト。の。縁。縁。  
を。ま。父。父。だ。ら。と。と。て。傳。よ。父。父。の。ほ。歎。く。と。と。り。

### 此日已遇命即裏滅

・ も。す。ま。な。命。と。と。と。と。入。ね。の。縁。の。と。と。と。

出曜經。此日即遇命即滅。如小水東逝有何樂。と云々なり。一セ毫  
をハナシテ。余に令まし。而て滅す。人ふれをつらう。おのれをせざき  
と。

弁恩入無為  
寂然

もしすすとしつれのせもあらもへし。むづくとも人主ひし。  
悲華經。流转三界。恩愛不斷折。弁恩入無為。真實報恩者よ。も  
物句ハ。弁恩佛たゞ入たるき。二のうも。三界を。出するも。三界のゆき。恩  
ひりいふと。そのきハ。恩をする。佛はえど。三界の中。宿能  
して。よ。毎と。汝が。よ。うなれ。また。恩を。おもじ。う者と。父母は。ほ  
うめ。幸す。佛のみ。ほりし。ゆ。毎と。汝を。まつて。深き恩を。まつて。トキ。

金會有別離  
源季廣

四

あらましと峰より。とくと白雲のうちは世のいとく。さう。

涅槃經。威必有裏。合金會有別離。命為死所否。無有違常者。も。う。

白雲のゆくと。くりくふとのあらまのうを。三のうのトモアヒト  
トシ。まのあらまは。おもは。がく。かく。さく。まく。まく。

同名欲往生  
寂然

あまやかへ。そひづつ。さのねまづりへ。わをひづつ。お

金會有別離。其体本願方。同名欲往生。皆悉到彼國。も。う。天つりハ。天つり  
と。こ。ま。う。う。と。と。は。陀佛を。ほ。も。げ。い。ほ。と。と。か。か。か。と。一。そ。の  
ま。ら。は。陀佛の。ひ。と。と。と。り。ま。さ。お。と。ほ。陀。く。我。ら。み。る。

般。この。發。が。し。ら。氣。を。や。そ。ほ。や。す。か。か。か。か。

心懐恋慕渴仰於佛

おはり。このゆくのよ。おはり。おはり。山の内。おはり。  
おはり。おはり。當生。お難遭。お想。心懐恋慕渴仰於佛。使種善根。とも哉  
ねふ。舟の。こ。ハ。佛滅度。の。な。う。も。い。も。う。て。お。う。も。い。も。う。と。お。う。も。  
く。方。便。ハ。涅槃。の。う。と。力。も。う。と。て。  
も。あ。船。の。出。

十戒の歌トト作焉に不效と成

ノリ川のほとり一ツ、山のわきで木のわきをよ  
或ね、ゆきをうつし、幾かまかと、やむれに成る  
そそく。又かくも、眞と成る。」  
「あすちー。  
「あすちー。

### 不偷盜戒

モタガの紫とほり、ほりし、モタガはなに、皮  
三のアヒトのひぐれてのま。ナハの縁の河は  
アヒト。盜人の事とつねじり。漢の時、白皮と小石と美  
よ。み國の盜人を白皮と小石とて、波打ふこ一首の  
ミタマジマのあさと人をとむとて、ハサヒム。

### 不邪婬戒

はねたよがたの、のまくとまくはまくわを

はねたよがたの、佛はそばに纏のとります。安  
祀とまくとまくはまくわを

衣の縁より。

### 不酔酒戒

たのわくとまくはまくわを。ひまくとまくはまくわの山に  
二の山の山とまくはまくわを。あたう。まはまよほをまくはまく  
のまくはまくわを。のしれ山とまくはまくわ。のしれ山の山とまくはまく  
のしれ山とまくはまくわ。のしれ山の山とまくはまく  
のしれ山とまくはまくわ。のしれ山の山とまくはまく  
のしれ山とまくはまくわ。のしれ山の山とまくはまく

主より、おもむかうるえをのりすれど、さあまよひうきでを  
持つて、おもむかうるえをのりすれど、さあまよひうきでを  
すくしわねと、そのまへ、あひゆふほどのして、れんすむもよつ  
くる年年年のます。しもかねは、あひゆふほどのして、れんすむもよつ  
ゆるやく、おもむかうるえをすらうなげの山をよこす。

### 入道赤闌白家・千如是哥トモせゆるに誓報

#### 二條院贊故

まよひの年、やまとすばいよせをくもすけし  
お便足・千如是といふまのあひゆふほどのして、れんすむもよつ  
くま事のあひゆふほどのして、れんすむもよつ。そのまへ、あひ  
ゆふほどのあひゆふほどのして、れんすむもよつ。そのまへ、あひ  
ゆふほどのあひゆふほどのして、れんすむもよつ。何をばす。何をばす。  
はよ。

### 侍賢門院中納言・よまと二十八年の哥・は

はる、序而度度法衆生其數有無量の不

#### 後事

まよひの年、やまとすばいよせをくもすけし  
お便足・千如是といふまのあひゆふほどのして、れんすむもよつ  
くま事のあひゆふほどのして、れんすむもよつ。そのまへ、あひ  
ゆふほどのあひゆふほどのして、れんすむもよつ。何をばす。何をばす。  
はよ。

美福門院極樂六時贊のむよひを年にてま  
つべきと。はるに、清の多聞大衆はて笑  
て歎歎と贊作を。

今それ入食を、とよもよひとよひ。おもひのは圓の夕のま  
大衆はを坐す。お瀧を下。耳へ音のととひ良きうちね。物々  
と合ひする。おもひのととひ。おもひのととひ。おもひのと  
二のうととひの入ととひ。極樂六時贊はりととひ。おもひ  
ととひの清の多聞大衆はととひ。おもひのととひ。

暁ひあてはるる全の岸よすむ社

川への尾上に浮き似たる岸よりすみの暁のちゑ  
川の裏壁よかずして岸のすみの腰のすみ裏壁  
もすー尾上のうねのうね

百首歌の中より毎日晨羽入諸定

式子内親王

朝の朝と夕の夕とをもよよせの暮と此  
三の句定へ入で詠念するときもいふがとく  
て心物句の三つあるとし定の三あつても  
ほきんの後とは頗るの後とほきんと  
是とさういふりよ後とひづりすうへは後と

ゆをそそりとまくとむかし世顛比危經よふわよも  
比危の事からと詠公みづの半うしてよもよも  
經のことをうづくとて文面どりてよもよもひはひのく  
えのむく毎日晨羽入諸定<sup>ハ</sup>化六道拔苦樂<sup>ハ</sup>も  
我毎日晨羽入諸定入諸地獄令離苦<sup>ハ</sup>りを乞<sup>ハ</sup>  
西行は行をといひゆくしまく<sup>ハ</sup>きト一<sup>ハ</sup>やあく<sup>ハ</sup>  
ても力のあくとまくに門のまくとゑよとひてよもよ  
つうり

侍賢門院鶴川

物々ハ極<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>なき<sup>ハ</sup>せん<sup>ハ</sup>やめ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>す。月<sup>ハ</sup>上人<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>も  
首のま<sup>ハ</sup>極<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>れぬ<sup>ハ</sup>とお<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>びき合<sup>ハ</sup>をちく<sup>ハ</sup>門<sup>ハ</sup>のま<sup>ハ</sup>とゑ<sup>ハ</sup>す

すながせりといひあま。すとく西行とも月の娘の門。やうめへ、傍に  
合ひえとりを向ふある。

返

西行

立りて雪うらとまく。やうらはまみん。  
物々と門あとをそよとまく。二の門ハ前とて寺りと  
リ。下の方たぬけ。まきとまく。あと行はれりとせ。推量  
せ。ま。やとひ。うとじて。もとをなさざとまきま。

おまけをうよい。三月の娘のくもなり。

觀心とどき侍

晴れてくろの空ふす。し月八日は山すやうく成らし  
初々ハ頬凶のやまく。二の門ハ前とて善提の肩輪  
のすめう。下の方たぬけ。まきとまく。あと行はれりとせ。推量  
せ。ま。やとひ。うとじて。もとをなさざとまきま。

古事記傳

附三大考 目録類字 四十八冊

本文古事記も總三卷小て上卷ハ天地初  
世どみみよさく天四皇應不和合の事と記し  
本り難じ上勝き武五十小神合の事と記し  
の書小く此とて小尊語天三至天皇までと中卷所謂神代の事と記し  
先紀書略記敬吾拜見る國史舊書元明止る以上卷ハ天御代下卷も仁代德記し  
達名ハひ國史書元に辭其身の君より皇國にを了和神代及下卷も仁代德記し  
儒末佛書元に辭其身の君より皇國にを了和神代及下卷も仁代德記し  
の多集ちるるの皇國にを了和神代及下卷も仁代德記し  
見け小く天皇代實の事と記し  
解げれ引い趣國餘の古傳出銀田阿波五年太祖朝之代德記し  
小をと易今小國古傳出銀田阿波五年太祖朝之代德記し  
て此のあからと生ハ傳記されら大た奴とだらむ人の事と記し  
取記されら大た奴とだらむ人の事と記し  
あ小どに異る幸と喜由常記なり推古天  
つ歎金通於幸と喜由常記なり推古天  
されべ記既べと國かわをれり也小誦と奉  
もくも釋同釋き心のきり也小誦と奉  
のを釋讀なり先上も熟奉  
のみら注に釋なり神界先上も熟奉  
るにばれよさ貴國やおれたま

速取世事ふ國たるら年四終せ元日二  
日合ノ紀と史きの小古か年てて明本人  
金せずあのみのバさと語く小貢此天紀と小  
の又後ノ偽用さそのとれ成進古皇ノにむや  
天ノ往ノ人ノ書ひまれのあひと事和ノ河ノセ  
よ々の事た此みと三ノろ承ノア本記銅ノ  
古偽本記ら悦うよとさ續ノ書と四とて帝  
降語轉ノ紀よハぞびらりして日の撰ノ年以帝  
已拾ノと十名と此ノ漢古此本序鑄ノ九  
坐遺ノ卷ノをとて記ノ學ノの古紀文ノ月ど及  
時ノも聖ノだとのあさ實事に小り十二上  
のしの徳辨ノからすのうり記説見た八つ故  
吏ノか太ノぜちをみみりあはきゆ日と諸  
と取ノ子ららうや日にモ字ノ日か太ノ吏ノ  
五ノきてのれぬりふ本行ノさのた本同朝ノ世ノ  
れり古撰ノち世ノ紀くま文ノれ紀ノ五臣ノ小記  
卷ノ但事うり多のとハれとよハ年安ノ傳定ノ  
尾ノし記ノいそし人ノ見漢ノて失ノか此同ノ正月傍ノらめ  
張ノ三ノとしの彼ノての何ノもざ記天ノ月ノ伊ノラ  
連ノの日真ノ大ノ取ノとハ國ノ夷ノじらりハ八詔ノ  
物ノ卷ノ本の畧ノ詮ノの正史ノトとびりハ八詔ノ  
部ノの紀紀に又ノし小か勤ノハ養ノ日ノか  
連ノ饑ノと小金ノ田ノたき似ノみたもハ老功ノに

と百子ノ一ノされ國いた舊ノから古ノふ工惠れ  
ハ舊ノ書ノより小もは事六やを傳ベ夫ひを  
少ノ我ノとばかり國上彼ノとき成ノ高却ノ  
も部馬ノ以日さ史ノ此ノ代の教と就くて  
の并ノ子ノ日本ノとる書ノの大始漢ノ傳ノ志  
ム紀小置や一ノ其前簡ノ書ノたとたとの  
る民ノ臣ノの修既てう卷ノ二ノ小もなししろ立妨  
等ノ數撰ノく言ハ小書ノ日からる辨ノ一ノ古ノに  
し本ノと多の史事ノ日論と本ノ本ノ易ノじ名ノ世人ノ  
又記ノもし頃ノと本ノ辨ノと書ノ文ノ詩ノ載ノらのま  
天ノとにさハり記紀あり紀と書ノても大曾ノな  
武鑄ノ天ノて古ノてさ小りハ小春ノ春ノ著ノ有り  
天ノし皇ノ推記記し允先ノしに秋通る述ノの來  
皇ノた記古ノあさむ恭卷ノて聖後等のハ小學ノ  
及天ノよきと天ノ首此ノ徳世ノ注ノ普ノしがけ  
十年ノ國ノ皇ノとけあ皇ノ古ノ太ノ小傳解ノくてをる  
小是記ノニあじと四記事ノ子傳ノ小と古ノ疑ノと  
川今臣ノ十ノ六ノ巴年典記ノのる比ノハ記事ノし本ノ  
鳥連ノ八ノと朝八事ノ小撰ノやへ體ノに記ノ三居ノ  
皇ノ伴ノ年ノ知廷月ノ傳ノたり裁ノあ注ノ十先ノ  
聖ノがれ小始總ノかまふと同ノ分解餘生ノ  
等ノ舊ノ事ノ造ノ國ノ德ノ太ノく  
十紀造ノ也ノるか事ノハく

の世次と十の卷國造本紀  
しるべし。以上反詮古きらの論い他小古書ありて取  
しゆり。或人古事記成て後八年と經同天皇舍  
し神と本外と之の字あ疑問小答  
じ又て本外と之の字誤る本紀と撰もしめり  
字奇が又小かも鰐誤る支世おう流れ上流ふる論  
伴よく小さき尾と京も先加頭脱り  
友見傍て異張柳を生へ本訓  
主覺假書本名井比ひ字誤る本紀  
のえ字しし古教校せらも脱す私とばに訂ひし  
鈴さと訓こ屋義ししと本二部乃り本書  
屋のやて施ハキ大體のて改ひし直ろしと見  
翁傳さとれ真書入得えりと直ろしと見  
畧ハシタ古用福これらとふと見  
年譜むれ書捨れと之をとふと見  
にべぞと證詮本寬ふとふと見  
明きよ證詮本永と其一部又と見  
和くひ人と定誤板小又と見  
元〇人此は此あ歲本殊大又と見  
三傳訓密文殊大又と見  
十著と小に小うと見  
五歳の誦寔立と見  
古二

歳にて古事記傳の稿と始  
寛政の時上巻の傳既に成り  
後文政五年に辭成と同十一年六十九歳中巻  
此後書も古説を解して古意とさせたり  
一卷古學の趣ととすくもとさせたり  
古記典等總論元例の本小子息春庭主記し置  
記題号の事  
假字の事  
註法の事  
註靈七十二丁九十八丁二四  
此書ハ道とよとれ論うりと注して云々神道の本意と本  
文小述自注せられたる古人未發の明解にて當時より後々

まで諸家小おいて議論ひがくされどそは皆取とらふたうぬ  
更さらにて此書このと学者がくし必聞記きして常つね小口熟後世ごと故導いざな

伊い専せん要ようの文章ぶんじょう

二卷 安方偶奏上いぐいじょうの序文じゆもんと載のてくもーく解わかり次小系因こくいん (二十一丁さう古事記こじき)

天地初發はじめほの段だん (一丁いつ)

かのこう島ことうの段だん (一丁いつ)

御宇氣比みやこの段だん (二十九丁にじゅうく)

須佐之男すさ命みこと御被避みゆきの段だん (二十八丁にじゅうはち)

須佐之男すさ命みこと御啼みゆきいきらの段だん (十五丁じゅうご)

大國主神だいこくしゆ御子みこ御孫みこ御天みあま降おの段だん (六十五丁ろくじゅうご)

八卷

稻羽素兔いなみその段だん (一丁いつ)

手問山てのきさんの段だん (十四丁じゅうよん)

大國主神だいこくしゆ御子みこ御孫みこ御祖みくわ別べつの段だん (四十九丁しきゅう)

九卷

須佐之男すさ命みこと御荒備みやがの段だん (一丁いつ)

須佐之男すさ命みこと御石隱みやの段だん (五十九丁ごじゅうく)

迦具土神かく被殺ひせきの段だん (三十九丁さんじゅうく)

十卷

御身滌みみだりの段だん (三十七丁さんじゅうしち)

八侯はとろとの段だん (一丁いつ)

天石屋戸あまいしやどの段だん (十七丁じゅうしち)

十一卷

須佐之男すさ命みこと御啼みゆきいきらの段だん (十五丁じゅうご)

根堅洲國ねぎの段だん (此こ)

大國主神だいこくしゆ御末神みゆき等とうの段だん (五六丁ごく)

十二卷

少名毘古すくな那な神のかみの段だん (一丁いつ)

幸魂さち奇き魂たまの段だん (十六丁じゅうろく)

日向宮ひむか御鎮座みちんざの段だん (六十五丁ろくじゅうご)

十三卷

大年神だい羽は山さんノの神のかみ御子みこ等とうの段だん (一丁いつ)

幸魂さち奇き魂たまの段だん (十五丁じゅうご)

後ご如ご君くみの段だん (一丁いつ)

十四卷

御孫みこ命みこと御天みあま降おの段だん (一丁いつ)

後ご田た昆く古く神のかみ阿射あせ加かの段だん (八丁は)

木花佐久夜きはさくよ賣め御子みこ產うぶの段だん (三十七丁さんじゅうしち)

十五卷

御孫みこ命みこと御天みあま降おの段だん (一丁いつ)

綿津みづ見み宮みやの段だん (九丁く)

鶴羽産屋つるばさんやの段だん (六十二丁ろくじゅうに)

十六卷

御幸易みゆきの段だん (一丁いつ)

鶴草つるくさ奉ささ仕しの段だん (五十三丁ごじゅうさん)

火照ひて余よ奉ささ仕しの段だん (八十九丁はくじゅうく)

十七卷

御幸易みゆきの段だん (一丁いつ)

白檮原宮しら原宮はらみやの段だん (神武じんむ)

日向宮ひむか御鎮座みちんざの段だん (六十五丁ろくじゅうご)

十八卷

御幸易みゆきの段だん (一丁いつ)

浮穴うきあな宮みやの段だん (安寧あんねい七丁しち)

高岡宮たかおか宮みやの段だん (懿德えいとく七丁しち)

十九卷

御幸易みゆきの段だん (一丁いつ)

拔上ばくじょう宮みやの段だん (孝昭こうしょう十七丁じゅうしち)

秋津島宮あきつしま宮みやの段だん (孝安こうあん三十四丁さんじゅうよ)

廿二卷

御幸易みゆきの段だん (一丁ひとつ)

黑田くろ宮みやの段だん (孝晃こうこう三十六丁さんじゅう)

境原宮さかい宮みやの段だん (孝元こうげん一丁いつ)

廿三卷

御幸易みゆきの段だん (一丁ひとつ)

伊邪河宮いが宮みやの段だん (開化かいが四十一丁よんじゅういち)

廿四卷

御幸易みゆきの段だん (一丁ひとつ)

水垣宮みずがき宮みやの段だん (崇神じゆじん無仁むじん)

廿五卷

御幸易みゆきの段だん (一丁ひとつ)

玉垣宮たまがき宮みやの段だん (無仁むじん)

廿六卷

御幸易みゆきの段だん (一丁ひとつ)

日代宮ひしろ宮みやの段だん (景行けいこう)

廿七卷

御幸易みゆきの段だん (一丁ひとつ)

廿八卷

御幸易みゆきの段だん (景行けいこう)

古

諸普ち皇世同歌世やのの軀朝此  
 のと兄弟通ふの継書尔の荷万大傳尔  
 説公のと御がによ意田成といたる  
 魔說古代物高せれ考ふるも種々の歌  
 れむと遊爾へ於大人に語野をど  
 どいのとも孝りんのバ尔の萬葉の数  
 加いの後天見田時とつれいもれき  
 戎又諸歌天ひひ天孝集もどりく  
 爺も兄弟の皇つたへし尔の萬葉と  
 真の公の勅とあれを奉て或撰た  
 万葉集もと聞えじと借文に加古  
 といふもい家持の大臣とけらる也  
 今いの郷前はる人葉を以て歌  
 り種々増き撰ぞ天翁也葉と旅ふ  
 二先かどし

### 萬葉集畧解

金三十二卷

廿九卷	日代宮の段	一丁	志賀宮の段	成馨 四十七丁
三十卷	代宮の段	一丁	志比宮の段	仲哀
三十一卷	三十三卷	二十四卷	明宮の段	應神
三十二卷	三十六卷	三十七卷	高津宮の段	仁德
三十三卷	三十八卷	三十九卷	遠飛鳥宮の段	允恭
三十四卷	四十卷	四十一卷	穴穂宮の段	安康
三十五卷	四十二卷	四十三卷	壅栗宮の段	清寧 一丁
三十六卷	四十四卷	四十五卷	廣高宮の段	仁賢 七十二丁
三十七卷	四十五卷	四十六卷	玉穗宮の段	繼體 一丁
三十八卷	四十六卷	四十七卷	檜壇宮の段	宣化 其十
三十九卷	四十七卷	四十八卷	他田宮の段	敏達 四十六丁
四十卷	四十八卷	四十九卷	倉椅宮の段	崇峻 六十六丁
四十一卷	四十九卷	五十卷	朝倉宮の段	雄略
四十二卷	五十卷	五十一卷	近飛鳥宮の段	顯宗 甲八丁
四十三卷	五十一卷	五十二卷	列木宮の段	武烈 七十六丁
四十四卷	五十二卷	五十三卷	金箸宮の段	安閑 二十三丁
四十五卷	五十三卷	五十四卷	師木島宮の段	欽明 三十四丁
四十六卷	五十四卷	五十五卷	池邊宮の段	用明 六十丁
四十七卷	五十五卷	五十六卷	小治田宮の段	推古 七十丁

尾州名古屋本町通七丁目

永樂屋東四郎

源又。。。た尔く本とひも説かいのどとし  
躬此古拾人古うすれ居ハとゆくつ次しし  
弦器葉總の本ももう先あとよる尔今  
の解器本と東 そら生あげ人してよみ七の  
三作類せ季てと九 るびのつゝてくせ以三  
人者聚吟るるの も○説との翁 丸下と  
み摘抄古の一本え 附枕とおい漫加例也と今十  
又千春本校本から 錄詞もきひ後茂小年と四  
け蔭の日じ合る元。 小のうと出と小翁も久同と  
るとう若外曆活 注注ま丸せものるしじし  
よ助つ宮小字 とハと例の友家いきか今  
しけ神古軒本 ろ冠采小に達尙○事くの  
文以ふと主葉書校一と上し難の器合本の  
摘凡あ波先要りせとい 考しのじと注れあと  
要例るの祖集官下ね 也に千ア考あひ解ばれ十  
いのを江祐茂東本から ○平田翁翁をせ代活  
ニ春世建のし西本 校り己沖され考けつ  
二十海恭長考解本記 し合器新師しらひ記  
卷轉の葉ふ伊 いし説東とし別記今  
目道写こよ抄り校勢 南思とし記今  
卷別 加合國 いれそも万思とし記今  
の

十卷猶十持ハ上る他大と十一四から十  
五と卷九家戯娘なと夫舉一れの千○が卷  
とし次世集笑子よりかのて十以三惣の  
十今とハの躰の今を家卷ニほ二百哥よ内  
一の微家中と贈のり集と上集もじの十員  
の五細持小の和十て今結ふり玉宮卷首のと六  
卷とトのもせ今五此のびいたと風きとや事い  
九教家やとののニセたるれあ大もりへいり  
しの今集ある十卷卷のるじ体長う宮にり雲  
今卷のめらう六ハを卷ふ六奇ら振古○御上て  
のと十るむ中の新う十うのと時今加抄の其  
八と事今に卷羅とのべ卷わ代の茂翁に如餘  
と今ヒさの河ハのむ卷しハくはと新翁四くも  
十ののだ三村前御すハ今今寄し新翁千諸  
二九卷う王後使し哥のの四今に三兄葉  
とととあり四大曲の誰も五十のの改百公と  
し十の今由九持る中入くハ卷の卷と首小  
今卷の四と七小十と歌臣の集山古卷とた袋定  
としをか七入る宅集ぶ上ときハ三另草  
と今ハ茂十るて守めと憶東会の卷紙セ  
と今三の翁ハ家中勤と良の翁の卷次から

彼小てる假注訓次大書も  
末筆尔と此万葉集畧解をべて三十卷寛政三年二月十日  
小哥事字解と小成解ねびと此  
失暇とれの訂正せぬ  
ひ入解くて謬正例も千蔭とあて同八年八月十七日小稿成  
大耶誤り也卷首よりて昭和十二年正月十日まで  
此畧解たり其餘益々改め事町喧嘩解をべて三十卷寛政三年三月廿五日まで  
諸名く家園駄つらば語を志す  
全珠雜記に初覆題極すれども諸本と比序の間うよ  
備注繕り書心極すれども諸本と比序の間うよ  
し繕代必ず綴の了すれども諸本と比序の間うよ  
と繕代必ず綴の了すれども諸本と比序の間うよ  
か西仙る革勤あるぞも諸本と比序の間うよ  
ら記覚と以ちるが精抄へ會ハサウエ得の古ハサウエし専と比序の間うよ  
ものと見ば此密ハサウエ古ハサウエし専と比序の間うよ  
得過風野易し専と比序の間うよ  
れて専と比序の間うよ

板元

尾州名古屋本町通七丁目

永樂屋東四郎

万二

三代調和歌類題

六冊

れもそがの類小万葉さみち哥月や風代  
と中めえ城題隨葉す人き大約さ調の哥  
る山やたらふして哥三代とハ古今集  
本美みるて題仙代ちたらとくもと代  
居石少岩初と家集くもとへ詞代  
大實夏上學附集くもと花代  
平相眞女氏のと夫もとぬもと  
主院龜小の手と木とモバ三に花代  
の故龜ハ家本と鈔よ三代くも花代  
序道定免刀と原より代類集りら実も  
文よりづ自ら書じふの題とらぬも  
小どからう登しのよて作者ハ此  
あとの孫しき子と書ぬきの三鏡  
今よしろ夏とくはきの吟代か鏡も  
や文夏といこ省出勅つうのうもく代  
都とひいふもくし撰き作者都と  
ももし哥ハズえ古ハサウエとハ意  
都院四年六月セとくは定され雄  
もみ河季ひ六き哥の家と  
哥道盛と文國憲集怡ハまた郷大  
道盛と吉雜詠管入りまたまの空く同じ

## 江戸職人歌合

二冊

東北院職人哥合鶴岡放生會職人哥合などの風小倣ひ江戸當世の職人とあつりそもうが七月十日浅草の観音堂小通夜し月と恋の題にて哥よみとろと左右につひ名主自ら哥よと判者よもよみて勝負とつけたり

十三

やうにつくよふしたる戯鞆アマテ小て難陳もあり哥も例の  
ごく俗談とまじへあるが今のは狂哥者流のえせ哥よち  
あらぞ上手の口つきいちぢろく画も加へたら小その  
さま見るがといいや

一 番左名主 右大屋  
三 番左八卦見 右人相見  
五 番左青物賣 右魚賣  
七 番左馬方 右車引  
九 番左女郎 右藝者  
十一 番左穢多 右乞食  
十三 番左猪牙舟ヒガボウ右四手駕シヨウカ  
十五 番左そじや 右湯屋  
十七 番左酒屋 右餅屋  
十九 番左筆結 右經師  
廿一 番左疊刺 右石切  
廿三 番左付木賣 右幕賣  
廿五 番左念佛宗 右題目宗

○石原正明弟  
周文化五年五月十五日伊豫國小てか

けろ序ありと正明の奥書ちる。右江戸職人哥合ハ  
文書をもととし、文政九年七月十日浅草寺小於て傳写  
藤原春季所にて暮遊。さる小依て賜ふ珍重とし、予以爲池南千貝聞  
浴せしむ堀舜の民小勝。とぞのうれいとて珍重。

## 玉勝間 附目録一卷 十五冊

是ハ本居翁の隨筆にして若年より書を記す事に觸れる。  
尋常の人がよくこれく年頃筆蹟のまゝ教の始りとへたる小字で、古書を記す事に觸れる。  
云々。華翁の随筆のうちの沙汰が今道に小もならぬ吏とへたる事に觸れる。  
文化九年正月植松有引とそのた尾とが書を記す事に觸れる。右江戸職人哥合ハ  
之は雅學者とへたる事に觸れる。嘉慶四年書の習い懸抄あ  
之は花鳥聞録とへたる事に觸れる。此録云々。其體多しくもが定めたりと定む。

は。便てちゆのきたからずつくなはすうきやり給へる。かのうがらみのうからくはすうきやり給へる。かのうがらみのうからくはすうきやり給へる。  
計録成達三下巻。うびら物有う信等りたまふやうかて此巻とくもかへる。今も  
のをすすりにあゆたはすうきやり給へる。かのうがらみのうからくはすうきやり給へる。  
のをすすりにあゆたはすうきやり給へる。かのうがらみのうからくはすうきやり給へる。

三之二九〇  
發行書林

江戸日本橋通音一丁目

須原屋

茂兵衛

同

通二丁月

山城屋

佐兵衛

同

芝神明前

岡田屋

嘉七

大阪心齋橋

筋北久太郎町

河内屋

喜兵衛

同

心齋橋

筋安上町南入

河内屋

和助

京都二条通衣

筋棚角

風月庄

左衛門

同

數屋町通姫小路七丁目

俵屋

清兵衛

尾州名古屋

本町通七丁目

永樂屋

東四郎

